

ものあつた爲か、藤兵衛の手指を断ち、持高を同名百姓に分與し、十兵衛を鼻切に處し、その持高を舊の如く耕作せしめたことがある。

ユヒサダキヨ 由比定清 初名彦市、後勳兵衛。父勳兵衛光清の歿後、遺知百石を割いて前田利常に仕へ、正保三年山奉行に任せられたが、能くその職務に勤めて鳥銃二挺を賞賜せられ、次いで承應三年祿二百石を加へた。寛文三年轉じて江戸御廣式番となり、五年出銀請拂奉行となり、八年小松御馬廻番頭となつて、延寶五年歿した。

ユヒシゲカツ 由比重勝 幼名彦次郎、後民部。三河の人。初め徳川氏に仕へて大番組に班し、二百五十石を受けしたが、慶長六年前田利常夫人に嫁して來り仕へ、二百五十石を賜はつた。致仕の後殘雪と稱し、寛永五年歿。子孫世々藩に仕へたが、嫡系は七代伴吉が文化五年七月十一日透電するに及んで断絶した。

ユヒゼンザエモン 由比善左衛門 由比重勝の子であるが、父よりも先に前田利家に仕へ、祿二百五十石を受け、後大坂再役には玉造口二、丸堀下で首一つを獲た。

ユヒタダカツ 由比忠勝 通稱五兵衛。重勝の四男、九歳で前田利常に仕へ、二百石を受け、馬廻組に列し、後前田利治に大聖寺に隸したが、數歳の後本藩に復歸し、寛文十二年齡五十三を以て歿した。

ユヒマサカツ 由比正勝 初名三助、後五郎左衛門。重勝の三男。幼にして天徳院夫人に侍したが、その體軀偉大であつたから夫人は大佛と呼んで鍾愛した。七八歳の頃から利

長に仕へて二百石を受け、寛永五年父の歿後遺知二百五十石を襲いで前藩を還し、次いで百五十石を増し、大小將組に班し、後馬廻組に轉じ、又大小將組に復し、寛文元年六十歳を以て歿した。

ユヒマサキヨ 由比昌清 通稱勳兵衛。初名孫兵衛正及。勳兵衛定清の子。祿三百石。割揚奉行・御使番より漸く進んで御小將組頭に至り、享保六年十二月十一日享年七十七を以て歿した。

ユヒミツキヨ 由比光清 幼名勢熊、後勳兵衛と稱した。織田信長に仕へ、天正元年齡十八の時將軍足利義昭を真木島に攻めて先登の功があり、感狀を得た。次いで長篠の役に陣し、軍令を犯して籍を削られ、飛騨に匿れ、十年前田利家に仕へ、翌年足輕頭となり、卒三十を領し、末森の役に從軍して祿四百俵を加へられたが、恩賞意に適せざるを以て致仕し、次いで利家の薨後利長に歸仕し、舊祿四百石を賜はつた。既にして横山長知と隙あり、復致仕して去り、諸國を漂泊し、利常の時三たび歸り仕へて舊祿を受けた。次いで大坂再役に出陣し、單身先登して左膝に傷を受け、又銃丸二創を被り、その功績調査の際再び長知と争うて賞賜を與へられなかつた。後に金の番取衆の一人に列し、寛永十年年七十八を以て歿。長子新右衛門祿三百石を襲いだが後裔なく、次子勳兵衛定清は百石を配知せられた。

ユフガホテイ 夕顔亭 金澤兼六園内に在る。此の建築物は、舊藩時代の遺容を今に傳へるもの、一つで、結構閑素古雅、亭前にある大きな石の手水鉢は、金工後藤程乘の作に係るといはれ、表面に伯牙彈琴の狀が浮彫にされて居り、亭側にある竹石手水鉢は、自ら竹の根幹の姿を備へた化石である。前田治脩の手記安永三年五月二十四日の條に『七時過蓮池へ行云々。庭の様子餘程體宜敷相見ゆ。就中中島の様子、柴等ふせ候様子、小松餘程うゑ、中々様子宜敷相見ゆる也。亭も段段出來す。亭脇の山川淺瀬の様子又一景也。』とあるもの即ち是で、七月朔日にはその茶席開を行つてゐる。これより後この亭は瀧見の亭と呼ばれて居た。亭の壁に瓢形のすかしがあるから夕顔亭というたのは明治以後のことだらう。

ユフキウチ 結城氏 寶永誌に、石川郡福岡村領の内に、昔結城七郎朝光居住の由にて居屋敷跡があると記してゐる。朝光の何人かは分からぬが、この地は福岡領のことであらう。結城氏には、康正二年造内裏段錢并國役引付に『參貫七百九十文、結城左近將監加賀國河内庄段錢』とあり、親元日記文明七年八月十六日に『結城鶴市丸知行分加州山内庄之内云々』とあり、長享元年常徳院殿江州御勅座記に加州結城修理亮があり、白山宮莊嚴講中記録延徳三年には結城方がある。この結城方は宗弘のことで、鶴市丸も修理亮も亦同人なのであらう。宗弘の子には七郎四郎宗俊があつた。

ユフキムネトシ 結城宗俊 通稱七郎四郎。石川郡福岡の土豪であつた。天文十二年白山諸堂造營の權利に關して、牛首・風嵐村民と尾添と相争ふや、宗俊は前者を援け、之を將軍足利義晴に訴したが、十四年六月廿四日附を以て敗訴の判決を與へられ、後に恥ぢて

東國に去つた。この時白山本宮は尾添の後援者であつたが、宗俊は養父宗弘以來本宮に對して敵意を挿むものであつた。

ユフキムネヒロ 結城宗弘 白山宮莊嚴講中記録延徳三辛亥十月十一日に石川郡住吉に治する結城方が白山本宮に關入したとある。これは長吏職を要望した結果で、結城氏は宗俊の養父宗弘であらう。この騒擾に祇院寺の僧清侍者兄弟三人・延命院乘俊父子・増福坊宰相・後藤九郎等戰死し、本院・地藏院・理觀院等は兵燹に罹つた。長吏澄賢の子理性坊澄範、時に年十六であつたが、奮闘して勇名を顯はした。

ユフバエ 夕ばえ 二册。嘉永七年三月八日蒼虬十三回忌の爲に、東山双林寺中の文阿彌で催した俳諧の附合及び追悼の發句集で、巻初に梅通が追慕辭を書いてゐる。

ユフヒガラス 夕日烏 一册。金澤の俳人既白著。寶曆十一年著者が加賀を出で、山陰・山陽・南海に遊んだ時の饒別吟を主とし、句寄を加へた集である。既白は先に松島に至り、今年橋立・嚴島等を見ようとしたのである。序は寶曆辛巳初秋日鳥鼠山樵、巳の晩夏狐狸窟仙半化坊。跋は日々庵松因。京橋屋治兵衛板。

ユフヒゴウ 下日郷 能登郡の古郷名。和名抄に、上日を阿佐比と訓するに倣つて、下日は當に由布比と訓むべきである。朝日郷を二つに分けたもので、加無都阿佐比・之毛都阿佐比であるとす説は採り難い。下日郷の位置は今不明である。

ユフヒテラ 夕日寺 河北郡小坂庄に屬する部落。龜尾記に、この村に觀音堂があり、